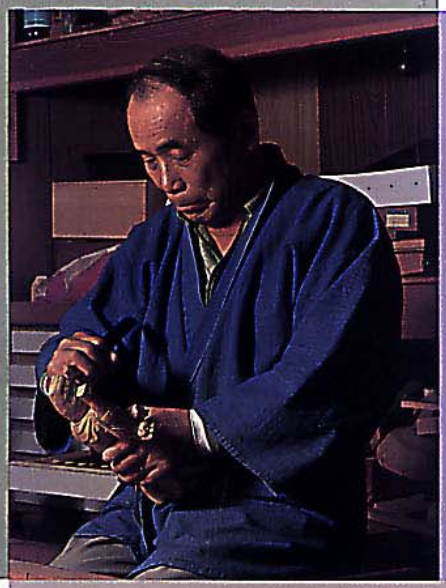

まちのカルチャー人たち①

木の中に命を彫り続けて

勝 本 弘さん(67歳)

サクサクと音がしています。部屋に一歩入った時から、もうほのかな木の香りがプーンと漂っていました。それはなぜか心安らぐ、そして懐かしい匂いです。

「毎日、何時間かはこうして木を彫っていないと気が落ち着かないんです。」

勝本弘さんは、そういいながらも手を休めようとはしません。本当に楽しそうに、そしてこの木がとてもいとおしいというような表情をしておられました。

香芝市畑に住む勝本さんは農業を営むかたわら、趣味として彫刻を始めました。しかし、その作品の見事さ、芸域の幅広さ、さらには打ち込み方など、とても単なる趣味の一言では片付けられません。すでに道楽や趣味の域を出ていることは、自宅裏に建てられた工房一つをとっても分かります。

「彫りを始めたのは、私が五十二歳の時、交通事故で足を骨折したことがきっかけでした。手先を動かすことで機能回復になればと考え、座っても出来ることと始めたのです。今では体もすっかりよくなりましたが、面白くなって、そのまま彫りは続けたのです。自分に向いていたのだと思います。

中学校の美術を担当される娘さんの影響もあって、次第に美術彫刻へとのめりこみ、奈良の彫師について修業されたのです。それで腕も上がって、いろんなものを彫るようになったとか。

自宅の応接間や工房には、勝本さんの作品が所せましと並んでいます。ここにあるものの他にお寺や個人に納めた作品も多いとのことです。翁や小面、般若などの能面から阿弥陀像、観音像などの仏像、五重の塔、そして建築の欄間など、作品のレパートリーは幅広いものです。

勝本さんの鮮やかな手つきから生み出された能面。
作品としてはこのほかに数多くの仏像が並んでいた。

「一番難しいのは、やはり能面でしょうかね。無表情の中に表現しなければならないものがありますからね。仏像は頼まれたりして作ります。彫ってから漆を塗ったり、彩色まで行います。」

これまでお寺などに納められたものは、畑にある専称寺への千手観音像・文殊菩薩像、法満寺の阿弥陀像などがあるそうです。出来栄えなど、もう仏師といってもおかしくはありません。

「木の中で一番彫り易いのは楠でしょうか。これなどは桧ですが。」

勝本さんは手にした彫りかけの四天王像を見せてくれました。そして右手には使いつくされた彫刻刀。彫刻刀は、そのほとんどが手作りとか。自分が使い易いように柄も刃も作るのだそうです。その刀の種類がまた多く、百本ほどの刀を使い分けるのだそうです。丸刀、三角刀、切り出し、これくらいしか、見ている私たちには分かりませんでした。

「何もない一本の木から、形や命を生み出す喜びが楽しみです。」

勝本さんの目が彫りかけの木材に向かう。手がなめらかに動いて、次第に造形がはっきりして、やがてそれは命を吹き込められた仏像となっていくのです。その作品にはきっと勝本さんの心がこめられ、そして必ずおだやかな優しいお顔をしているはずと思えて来たのでした。